

白削建直し

—出雲大社社殿等建造物調査から—

表7 出雲大社社殿等建造物調査対象物件一覧

建物名	『延享造営傳』	建立年代
1 根社 御向・筑紫・天酌社	新造	延享元年
2 根社 門神社（東・西）	新造	延享元年
3 根社 素戔神社	古本社の材木ヲ以造営	延享年間（寛文の古材を用いている可能性あり）
4 根社 氏社（南・北）	白削建直し	延享年間（寛文の古材を用いている可能性あり）
5 末社 諸社	白削建直し	延享年間（寛文の古材を用いている可能性あり）
6 末社 十九社（東・西）	—	延享年間
7 櫓門	白削建直し	寛文7年建立、延享元年解体移築
8 八足門	白削建直し	寛文7年建立、延享元年解体移築
9 神饌所（東・西）	白削建直し	寛文の古材を用いて延享元年新造
10 玉垣	白削建直し	延享年間（寛文の古材を用いている可能性あり）
11 観音楼	白削建直し	寛文7年建立、延享元年解体移築
12 廻廊（東・西）	白削建直し	寛文7年建立、延享元年解体移築
13 廻廊	—	延享年間
14 宝庫	白削建直し	寛文の古材を用いて延享年間新造
15 文庫	庇は新造立	土蔵部分に寛文の古材を用い、大正3年移築新造
16 会所	白削	寛文7年建立、昭和28年移築
17 彫古館	—	大正3年
18 貞資館（勸使館） 斎館	—	昭和8年
19 開鳥居	寛文六年	寛文6年
20 飛壇	—	門のいくつかは延享年間に遡る可能性がある

はじめに 平成13・14年度の2ヵ年で出雲大社に現存する社殿等の建造物調査をおこなった。調査は境内の摂末社から銅鳥居におよぶ20件27棟で実施した。その詳細については、平成14年度に刊行された報告書『出雲大社社殿等建造物調査報告』を参照していただくとして、本稿では、延享度造替遷宮の古文書『出雲大社延享造営傳乾』および『出雲大社延享造営傳（素鷲 坤）』（ともに出雲大社蔵、以下まとめて『延享造営傳』とする）に散見される「白削建直し」について、その用語の意味を考察するものである。

建立年代 近世初頭の出雲大社は、本殿をはじめとする建物は朱塗りで、境内には三重塔などの仏教施設が建ち並ぶ神仏習合化した姿であった。それが寛文七年（1667）の造替遷宮で神仏分離を敢行、全体的な彩色の廃止など仏教色が払拭され、現在みるような社頭の景観へと一変したのである。それ以降は、延享元年（1744）の造替遷宮を最後に修造遷宮がおこなわれている。したがって、現在残る社殿等の建造物は寛文あるいは延享度の建立であることがわかる。また、『延享造営傳』にはほとんどの建物について「新造立」あるいは「白削建直し」と記されている（表7）。この記載と調査所見とを照らしあわせ、建物の建立年代を推定するのであるが、どのように「白削建直し」を解釈するかが問題となってくる。

白削 『延享造営傳』には「白削」とのみ記される場合もあるため、まずは「白削」について考えてみたい。その言葉から真っ先に「部材を削って白くした」と思いつく。しかし、部材を鉋などで削った場合、仕口などにすき間ができるが、その痕跡は確認できていない。また、櫓門では上層内部に立つ2本の柱が、延享度の取替材と考えた側柱に比べて風蝕が強く残っていた。これを材種によるものとも考えることもできるが、内部の柱はケヤキ、側柱はヒノキであり、その可能性はない。やはり鉋などで削られたのではないようである。ところで、「白削」とのみ単独で用いられていることに着目すれば、解体せずにおこなえる作業であることがわかる。また、「建直し」には必ず「白削」が付属すること、「白削」は新造の建物には用いられていないことから、単にカビなどの

「汚れを落とした」と解釈すべきかもしれない。現状でも、カビやコケなどによって部分的に白色や緑色となっている部分もある。目立つ汚れを取り除くことで、新造に近づけようとした可能性は十分考えられる。

「彩色を落とした」可能性はどうだろうか。寛文度の造替では簀股などの彫物に彩色が施されたが、基本的には素木であり、その可能性はない。

次に、「白削」を一つの単語としてとらえ、「素木」と考えてみた。しかし、『延享造営傳』には「御神輿白木造り」とあり、同義ではないようである。ところが、『国史大辞典』（吉川弘文館、1986）によれば、「白木」は「木地のまま、または荒削りしたままの材木の通称であったが、木材の生産地が消費都市から遠のくにつれて、人馬による搬出も容易な製材した短軽材の総称となり」とある。『延享造営傳』における「白木」をこのように解釈することは可能であり、したがって「白削」を「素木」と考えてもよさそうである。とはいえ、問題点も存在する。「白削」が「新造立」の建物には用いられていないのである。やはり、同義ではないのかもしれない。

白削建直し 「白削建直し」の「建直し」はどのような意味なのであろうか。今回の調査で観祭楼の小屋裏から「寛文六年」の墨書を発見、同時に移築の痕跡も確認し、観祭楼が寛文の建物を延享度にほとんどの部材を再利用して現在地に移築されたことがわかった。しかし、宝庫では柱や組物に比べると頭貫や壁板などが新しく、柱などを寛文度、壁板などを延享度の取替材と考えた。一方、氏社や釜社では明確に寛文の部材が特定できず、また寛文建立の建物に比べれば全体に風蝕が少なく、延享建立と判断している。このように、「建直し」とは、「解体した部材を再び建直す」ではなく、「寛文度の部材を使用し建てた」という広義にとらえることができよう。

以上から、「白削建直し」とは「寛文度の部材をきれいにして再利用した」可能性が最も高くなる。延享度の造替遷宮では、寛文度の造替遷宮のようにすべてを新造とできなかったため、できる限り新造の建物に近づけたという意識が働いたのであろう。（西山和宏）